

日本人における情動概念の階層構造

齊藤, 崇子
九州大学大学院人間環境学府

中村, 知靖
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/893>

出版情報 : 九州大学心理学研究. 4, pp.95-99, 2003-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン :
権利関係 :



日本人における情動概念の階層構造

齊藤 崇子 九州大学大学院人間環境学府
中村 知靖 九州大学大学院人間環境学研究院

Hierarchical structure of the categories of Japanese emotion

Takako Saito (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)
Tomoyasu Nakamura (*Faculty of human-environment studies, Kyushu university*)

This study examined the hierarchical structure of the categories of Japanese emotion and the configuration of each category in multidimensional space. Using the questionnaire based on the paired comparison method, 167 undergraduates participated in the similarity-rating of 20 emotion words. The data were analyzed with cluster analysis and multidimensional scaling. The result of cluster analysis showed that there are 5 separate emotion categories such as love, joy, sadness, anger and fear. The results of the multidimensional scaling showed these categories vary along two-dimensions: positive-negative dimension and weak-strong dimension. That suggests cross-cultural universality of the basic emotion and the originality of Japanese emotion.

Keywords: emotion categories, cluster analysis, multidimensional scaling

近年までの情動に関する多くの研究は、我々の日常経験する情動がいくつかの基本的なパターンに分かれることを示してきた (Ekman et al., 1972; Izard, 1971; Lazarus, 1991)。喜び、怒り、恐れ、嫌悪、悲しみ、(驚き)等がその基本パターンとされ、それぞれに対応した身体反応や認知システムの存在が心理学的、生理学的に明らかにされている (Calder et al., 1996; LoDoux, 2002)。これらの研究の多くが表情、身振り、声などの身体的表出を指標としており、生理的、身体的な情動表出の基本パターンは、異なる文化の中にありながらもヒトに共通する普遍的なものであると考えられている。

しかし、これらの知見は情動に関するヒトの概念や行動のすべてが同じであることを意味しない。個体を取り巻く文化、社会などの環境要因が影響する複雑な情動概念や行動が存在することも明らかである (Markus & Kitayama, 1991; Russell, 1991; Wierzbicka, 1992)。これらの研究では身体的反応の他に言語を情動表出の指標としている。われわれが持つ情動に関する知識は、言語化されて個人の心内に表現されていると考えられる。言語は抽象的概念や具体的事物を表現する媒体であるが、経験的に獲得され、文化によって異なるため、環境の影響を大きく反映する。これより、言語による情動表出は身体的情動表出以上に多くの可塑的側面を持つといえる。

言語を指標とした情動研究は様々であるが (e.g., Scherer, 1988; Lutz, 1988), そのひとつに情動語のカテゴリー分類がある (Plutchik, 1984; Shaver et al. 1987, 1992)。彼らは情動語の分類にプロトタイプ理論 (Rosch, 1975; Rosch et al. 1975, 1978) を適用した。プロトタイ

プ理論は具体的事物を表す言語の内的表象についての理論である。日常的な事物を類似したもの同士にまとめる認知的な処理過程をカテゴリー化と呼び、そのまとまりをカテゴリーと呼ぶが、Roschらはカテゴリーはそのもともよい例としての典型 (prototype) により定義され、典型を中心として事例集合が序列づけられているとした。さらにカテゴリー構造には水平と垂直の次元があり、垂直次元ではカテゴリー間の関係が樹形図様の体系をなしているとした。この次元は大きく3つのレベルに分かれ、それぞれは「上位」「基礎」「下位」レベルのカテゴリーと呼ばれる。加えて基礎レベルのカテゴリーは生活環境の中で必要な属性知識の違いによって変動するとされており、様々な事例に対するカテゴリーの典型性が文化によって異なるとも述べている。

Shaverらは情動をカテゴリーと見なし、自然界の他の事物と同様に心内で階層構造をなしているとした。そして多くの研究者が「基本情動」と呼ぶものが基礎カテゴリーとなり、各言語に数多く存在する情動語はその下位カテゴリーに位置するであろうと予測した。彼らはアメリカで、英語情動語135語をカードに印刷し、100名の大学生に自由にグループ分けさせ、その結果をクラスター分析した。その結果、それぞれの情動語は類似した概念同士でグループをなし、これらをまとめるひとつ上位のクラスターに5つの基礎カテゴリー (愛情、喜び、怒り、悲しみ、恐れ) が出現した。また彼らはこの後クラスター分析で得た結果をもとにして多次元尺度構成法 (MDS: Multidimensional Scaling) を行い、各情動カテゴリーの空間的布置を検討した。その結果、各情動語は評価 (ポ

ジティブ、ネガティブ)と強度(低, 高)に相当する次元上に布置された。これより, この2次元がわれわれの情動認識の一般的な基準であることが示された。

同様の手続きでイタリア, 中国の情動語についても調査を行ったところ, アメリカと同じ5つの基礎カテゴリーが現れ, 3国に共通した情動カテゴリーの存在が示された。さらに中国では, アメリカ, イタリアで「悲しみ」の下位カテゴリーである「恥」が独立して基礎カテゴリーをなし, 「愛情」がネガティブな情動として認識されていた。これより, 異なる言語圏での情動概念の独自性も確認された(Shaver et al., 1992)。

Shaver らの一連の研究から, 情動語が階層構造を示すこと, 基礎レベルは5つのカテゴリーに分かれること, 異なる言語圏でそのカテゴリー構造に共通点や差異が見いだされることが明らかとなった。この結果は, 日本語においても情動語がいくつかのカテゴリーに分類され, それらが階層性を有することを示唆している。これまでに, 日本において日常使用する言語を用いて情動概念を分類する試みは行われていない。本研究では, 先行研究同様2つの分析によって日本語から抽出される情動概念の階層性と空間的布置を示すことを目的とする。クラスター分析によって日本語における情動概念の階層性を確認し, 多次元尺度構成法によって情動概念の空間的布置を検討する。

Shaver らの類似性の判断方法は135語の情動語をカードにして被験者に呈示し, そのカードを各自似ていると思われるもの同士グループ分けするというものであった。先行研究の手続きをそのまま実行することは被験者にとっての負担が大きくなると考えられる。先の3国による調査の結果より, 日本の情動語においても基礎カテゴリーは5つであることが予測されるため, 本研究では情動カテゴリーの基礎レベルを5つと仮定し, 情動語を各カテゴリーから選定して質問紙形式で類似性の判断を行った。

予備調査

予備調査では, 各情動カテゴリーを表す熟知度の高い情動語を選定することを目的とした。

方法

調査対象者 心理学講義を受講する学生117名。

手続き 「感情表現辞典」(中村, 1979)をもとに選定された熟知度の高い情動語(最高値4で平均が3.80程度)を川畑(1994)から75語選び出した。ここでは情動は10グループ(「喜」「怒」「哀」「怖」「恥」「好」「厭」「昂」「安」「驚」)に分けられていたため, 各グループから熟知度の高いものを4~6語選択した。また, Shaver et al. (1987)で用いられた情動語135語中24語を日本語に訳したものを加えた。情動語はすべて名詞とした。被験者は選定した99文字の情動語を5つのグループ(「愛情」「喜

Table 1
各カテゴリーを表す情動語

愛情	片思い, ときめき, やきもち, 愛情, 愛欲
喜び	気楽, 満足, 得意, 感激, 安心
悲しみ	哀れ, 残念, 悲しさ, 恥
怒り	不機嫌, いらだち, 激怒
恐れ	恐ろしさ, 不安, 弱気

び」「悲しみ」「恐れ」「怒り」)に分類した。

結果

得られたデータを集計し, より多くの被験者が5つのカテゴリーに該当すると判断した20語を本調査で用いる情動語とした(Table 1)。

本調査

方法

調査対象者 心理学関連講義を受講する大学生167名。

手続き 質問紙形式で調査を行った。予備調査で選定した情動語20語を対にしてすべての情動語を組み合わせ, 合計190項目をランダムに並べ替えた。被験者は各情動語対の類似度を2件法(似ている, 似ていない)で判断した。教示に従い, 対象者は15~20分で判定を行った。

結果

各情動語対について, 調査対象者が似ているとした回答数を加算し, それを各項目の類似度得点とした。また20×20の表を作り各セルにその得点を記入した。分析の際にはこの結果を逆転させ非類似度を用いた。

クラスター分析 分析の結果をFig.1に示す。分析にはウォードの最小分散法(Ward's minimum variance method)を使用し, クラスター間距離はセミパーシャルR二乗値(Semipartial R-squared)をとった。

クラスター間距離.502の大きな2つのクラスターは上位カテゴリーで, 情動をポジティブとネガティブに二分している。その下にクラスター間距離.040以下の5つのクラスターが出現しており, これが基礎カテゴリーを意味すると考えられる。各カテゴリーは上から「愛情」「喜び」「悲しみ」「恐れ」「怒り」とラベルづけできる。またこの樹形図の左端には調査に用いた20語がそれぞれ類似性の高いもの同士結合して並んでいる。この部分が下位カテゴリーを示すと考えられる。下位カテゴリーの中で, 「悲しみ」のカテゴリーとして選定された「恥」が「恐れ」のカテゴリー「弱気」「不安」と強く結合した(.0115)。

多次元尺度構成法 次に各情動語の空間的位置関係を検討した。得られたデータを非計量的多次元尺度構成法に適用した結果, 2次元解でのストレス値が0.14であり,

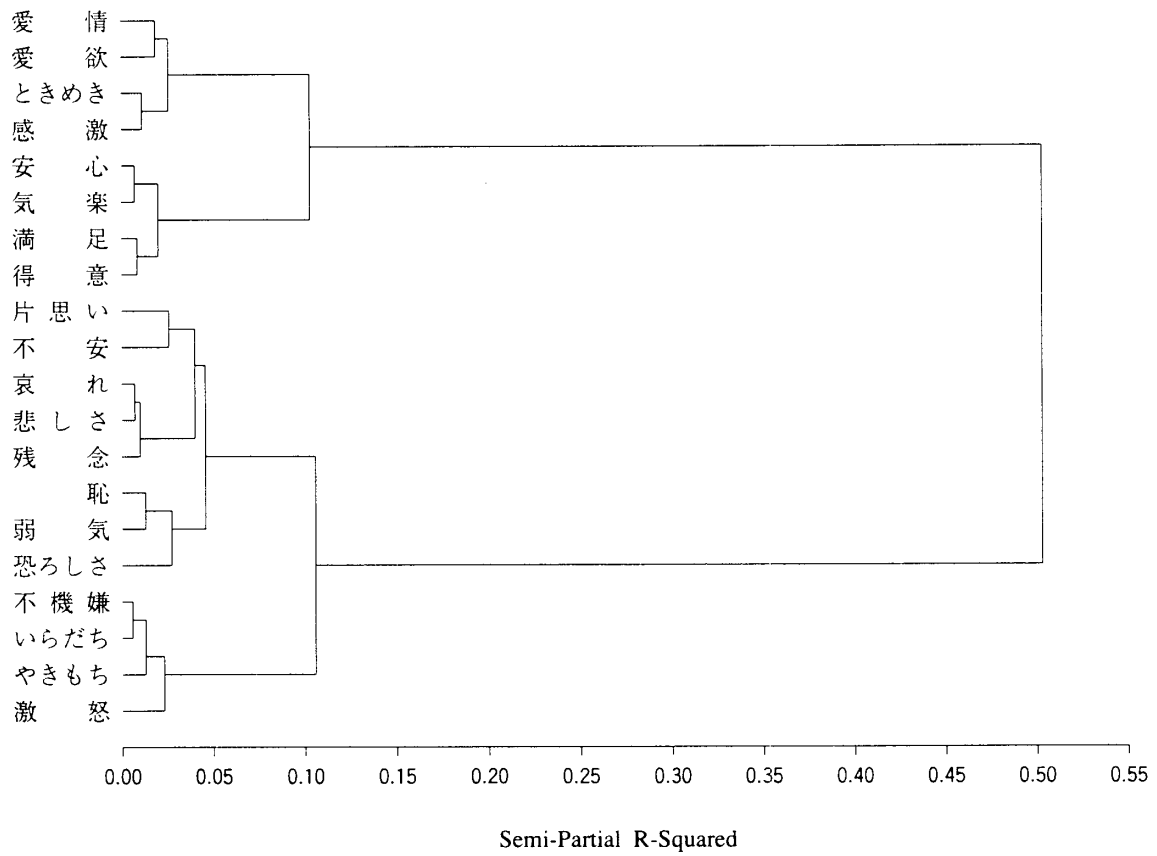


Fig. 1 クラスタ分析によって得られた情動語の樹形図

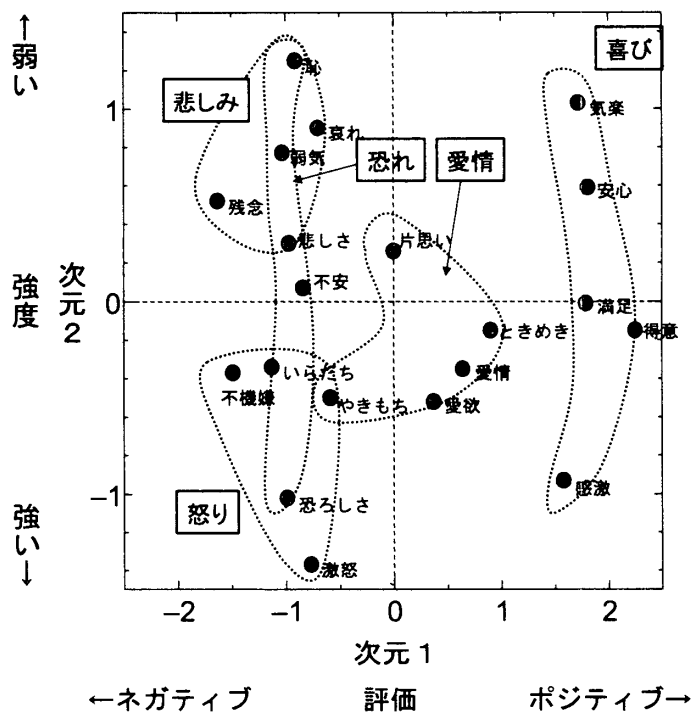


Fig. 2 MDSを適用して得られた情動語の空間配置(2次元解)

距離と最適データの関係もほぼ直線関係にあったため、当てはまりのよい次元数を2次元とした (Fig.2)。第1次元において、“安心”“満足”と“不機嫌”“残念”が対極に位置している。このことから第1次元は評価 (ポジティブ, ネガティブ) を表す軸であると考えられる。次に、第2次元において、“激怒”“感激”と“哀れ”“弱気”が対極に位置している。このことから第2次元は強度 (強, 弱) を表す軸であると考えられる。

さらにこれらの情動語をクラスター分析で得られた基礎カテゴリーごとにグループ分けすると、2つの軸を座標とする円環状にカテゴリーが配置している。カテゴリーの空間布置もこれまでの情動の円環モデルとほぼ一致していた (e.g., Schlosberg, 1952; Russell, 1980)。

全体的考察

本研究の目的は、情動語の類似性判断の結果にクラスター分析と多次元尺度構成法を適用し、日本人の情動概念の階層性と空間的布置を検討することであった。クラスター分析の結果より、先行研究同様日本の情動概念の中にも「愛情」「喜び」「悲しみ」「恐れ」「怒り」の5つのカテゴリーが明確に存在することが確かめられた。また多次元尺度構成法の結果より、日本語に表された情動概念が評価と強度に相当する2次元からなる空間内に分布することが示された。この結果は、先行研究だけでなく情動に関するその他の研究とも一致するものである。これより、情動概念の基本構造の文化的普遍性が確認された (Schlosberg, 1954; Ekman 1992)。

さらに、今回のクラスター分析の結果から、日本人においては“恥”が「恐れ」と類似した概念である可能性も示された。アメリカ、イタリアで“恥”は「悲しみ」の下位カテゴリーとしてグループ化された。このような差は日本人独自の情動概念の存在を示していると考えられる。情動概念の文化的独自性を説明するひとつの例として、Markus & Kitayama (1991) は、西欧社会と東洋社会の文化的特徴がその社会で形成される情動概念に影響を及ぼすとしている。彼らは、西欧社会を個人のアイデンティティ及び人格特性を重視しどのような対人関係の中にあっても普遍的な自己を築こうとする、あるいはその人固有の権利、要求、目的を第一に追求しようとする「独立的自己の文化」であり、日本を含む東洋社会を、個人の権利や要求よりも個人間の関係性の維持・確立に重点を置きた他者との関係に応じて相対的に自己を位置づけようとする「相互依存的自己の文化」とし、このような自己のあり方が各文化圏での情動の起こる頻度や状況に大きな違いをもたらすと述べている。西欧社会では、自己を中心とした思考がまず働くため、それを脅かしたり、高めたりするような事象に対して人は相対的に強く反応するようになる。そして「自己焦点型情動」

と呼ばれる情動の起こる頻度が高まることになるという。一方東洋社会では、自己よりも他者との関係に多く注意が向かうため、「怒り」などの情動の起こる頻度は低くなり、そのかわりに「他者焦点型情動」と呼ばれる情動が比較的多く経験されることになる。

これより、アメリカやイタリアでは“恥”は、「自ら」が辱めを受けたり、恥ずかしい思いをしたりすることで生じる情動であると「自己焦点的」に解釈された結果、「悲しみ」のカテゴリーとして概念化されたと考えられる。一方日本においては、「他者から」何らかの辱めを受けたり、周囲に対し恥ずかしい思いを味わったりする際に生じる情動であると「他者焦点的」に解釈された結果、「恐れ」のカテゴリーとして概念化されたと考えられる。Rosch (1975) によれば、カテゴリーは、生活環境の中で必要な属性知識の違いによって異なってくる。異なる文化環境がもたらす情動についての属性知識が、日本の情動概念と他の国の情動概念との差異を生じさせると考えられる。今回の結果は日本独自の文化環境が情動概念の形成に影響を及ぼしたことによるものといえる。

今回調査法を変更する段階で、使用する情動語彙数を少なくしたという問題がある。限られた語彙の類似性判断だけではなく、情動語彙を増やしたり、設定する情動概念を基本情動以外の語にも拡張したりする事によって、さらに広い意味で日本人の情動概念の構造や空間的布置を検討する必要がある。また、今回は情動概念についてのみの階層構造を検討しているが、これを表情表出などの身体的な指標に応用し、概念でなく情動そのものの階層構造の文化的普遍性や独自性の検討を同様の手法により検討していくことも必要である。

引用文献

- Calder, A.J., Young, A.W., Perrett, D.J., Ectoff, N.L., & Rowland, D. 1996 Categorical perception of facial expressions. *Visual Cognition*, 3, 81-117.
- Ekman, P., Friesen, W.V., & Ellsworth, P.C. 1972 *Emotion in the human face*. New York: Pergamon Press.
- Ekman, P. 1992 An argument for basic emotions. *Cognition and Emotion*, 6, 169-200.
- Izard, C.E. 1971 *The face of emotion*. New York: Appleton-Century-Crofts.
- 川畑光代 1994 感情喚起モデルの構築の試み 鹿児島女子大学文学部卒業論文 (未公開)
- Lazarus, R.S. 1991 *Emotion and adaptation*. New York: Oxford University Press.
- LoDoux, J. 2002 *Synaptic self*: Penguin
- Lutz, C 1988 *Unnatural emotions: Everyday sentiments on an Micronesian atoll and their challenge to western*

- theory*. Chicago: University of Chicago Press.
- Markus, H.R. & Kitayama, S. 1991 Culture and the self: Implication for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, **98**, 224-253.
- 中村明 1979 感情表現辞典 六興出版
- Plutchik, R. 1984 *Emotions: A general psychoevolutionally theory*. In K Sherer & P. Ekman (Eds.) *Approaches to emotion*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum. Pp.197-220.
- Rosch, E. 1975 Cognitive representations of semantic categories. *Journal of Experimental Psychology: General*, **104**, 192-233.
- Rosch, E. & Lloyd, B.B. (Eds.) 1978 *Cognition and categorization*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Rosch, E., & Mervis, C. B. 1975 Family resemblances: Studies in the internal structure of categories. *Cognitive Psychology*, **7**, 573-605.
- Russell, J.A. 1980 A circumplex model of affect. *Journal of personality and social psychology*, **39**, 1161-1178.
- Russell, J.A. 1991 Culture and categorization of emotions. *Psychological Bulletin*. **116**, 426-450.
- Scherer, K.R. (Ed.) 1988 *Facets of emotion: Resent research*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Schlosberg, H.S. 1952 The description of facial expressions in terms of two dimensions. *Journal of experimental psychology: General*, **116**, 223-237.
- Schlosberg, H.S. 1954 Three dimensions of emotion. *Psychological Review*, **61**, 81-88.
- Shaver, P.R., Schwartz, J.C., Kirson, D., & O'connor, C. 1987 Emotion knowledge : Further exploration of a prototype approach. *Journal of personality and social psychology*, **52**, 1061-1086.
- Shaver, P.R., Wu, S., & Schwartz, J.C., 1992 Cross-cultural similarities and differences in emotion and its representation: A prototype approach. *Review of personality and social psychology*, **13**, 175-212.
- Wierzbicka, A. 1992 *Semantics, culture, and cognition*. New York: Holt.